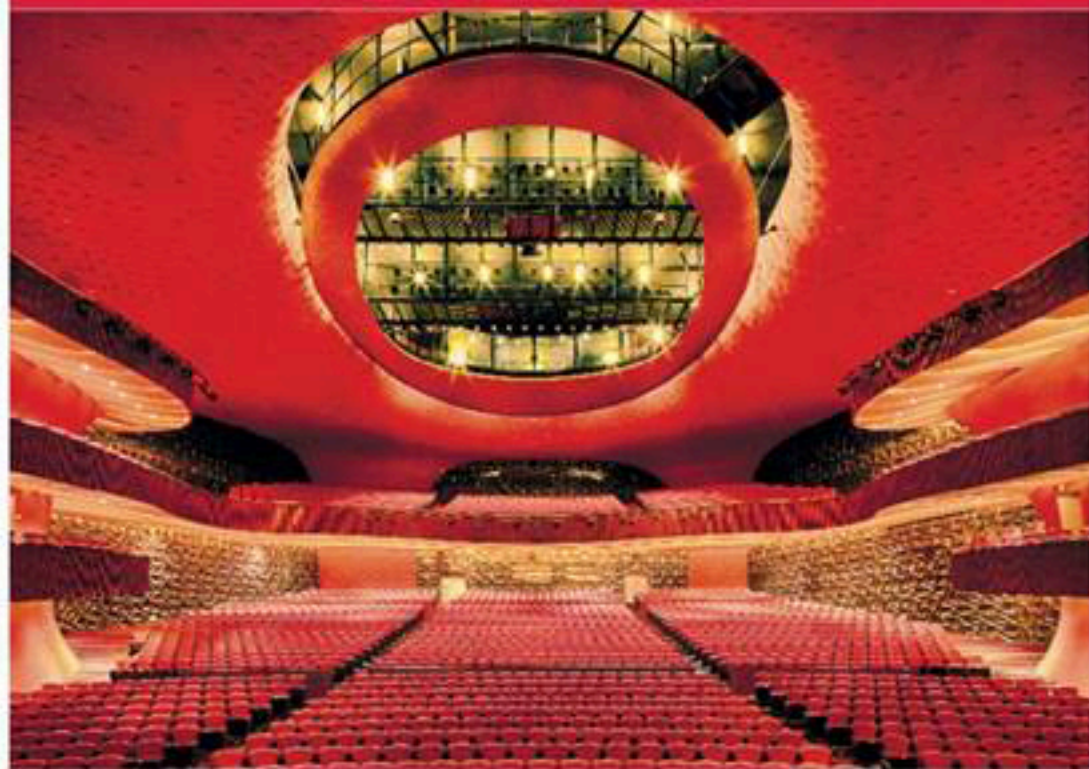




オランダのアムステルダム在住のアーティスト・美術家の向井山朋子さんは、大好きな「あわい」(あい)をパフォーマンスのテーマや空間として選ぶことが多い。「劇場に境界のない「あわい」の空間があるのはとても魅力的です。その空間をうまく使えば、おもしろい作品が生まれるのではないのでしょうか。9月30日に台湾の台中市にオープンした伊東豊雄さん設計の「台中中国国家歌劇院」で、向井山さんの作品「La Mode」が中劇場のこけら落としとして上演された。この作品も舞台と客席との「あわい」が表現される。「私が大好きな内と外の境界がなく、開かれた劇場」というのが最初の印象です。中は自然な曲線に導くような

台中国家歌劇院



2007席の大劇場(グランド・シアター)
(©National Taichung Theater)



ピアニスト・美術家
向井山 朋子

(むかひゆま・ともこ) ピアニスト、作家。1991年にオランダの国際アカデミア演劇家コンクールで優勝して以来、ピアニストとして、国際的に活動するオーケストラなどと共演するほか、映画、テレビ、建築家、写真家、作家らとのコラボレーションを行う。近年は美術家としても活動。(for you) 横浜トリエンナーレ2010、(you are back) (シドニー・ビエンナーレ 2011)、(wanted) (総後援有アートエンターテインメント2009)、(Nectarine (夜)) (瀬戸内国際芸術祭2013)、(sling) (あいちトリエンナーレ2014)などで作品を発表。近年の日本の代表作は14.コンサートシリーズ (Mitsui) (11年-13年) やダンス作品 (シロロ) (09年) など。07年、向井山朋子とのコラボレーションをオランダに、15年に日本で一般社団法人O+ (マルタス) 設立し、プロデュースの分野でも活躍。9月、(La Mode) (台湾・台中歌劇院、東京・Dance New air2016)、(Home) (さいたまトリエンナーレ2016) 発表。11月下旬から12月にかけて、オランダダンスシアターの制作家イネリオンとの共同制作パフォーマンス (Tar and Feathers) をパリのオペラで上演予定。公式サイト www.multus.jp



ライトアップされた夜の外観
(©Chang Chi-Chia)

「間」をテーマ、演ずる空間

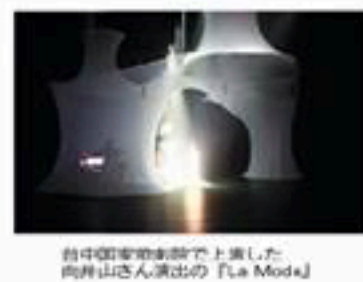
向井山さんは、「台中国家歌劇院」の第一印象を「開かれた劇場であることを強く感じた」と話す。それは「カネノイド」と呼ばれる曲面連続構造体の歌劇院と周囲の公園が自然につながっていたからだ。「建物全体が自然な曲線できているため、周囲の環境とけ込んでいました。大中小3つの劇場では、小劇場が中庭にある野外劇場とつながるようになっていきます。ここからここまでが劇場、あるいは舞台というのではなく、時にはあいまいに使える空間が用意されているのがとても魅力的です。私は境界のあいまいさ、「あわい」がすごく好きで、テーマや空間として使うことが多いんです。台中国家歌劇院はそのあわいの深さを感じられてとても素晴らしいと思います」

中に入った印象はこう話す。「巨大な建物にもかかわらず、女性的な感じがしました。女性的というのは、直線ではなく自然なラインで、包み込むような強さを持っていたからです。ある舞踊評論家が言われていてとても納得したのが、「劇場に行くのは自分を再生するため」という言葉です。弱くなって公演が始まって、終わった時に明るくなりますよね。それが「一回死んで、生まれ変わる」再生だとい

うのです。動内回りとも似ています。台中国家歌劇院の空間は、動内のようにでもありませんね」

中劇場のこけら落としは芸術監督を務め、ピアニストとして出演した「La Mode」を上演した。現代の宗教とも言われるファッションをテーマに、3年間の年月を費やして準備したパフォーマンスだ。向井山さん自身の言葉に「あらゆる分野の「境界」をなくし、消し、引きなおすこと」とある。舞台

デザインを伊東さんとテキスタイルデザイナーの安東陽子さんが手がけた。舞台と客席の境界がない空間で向井山さんのピアノが奏でられ、ダンスが踊り、最後はリズム感あふれるファッションショーが展開される。「安東さんのテキスタイルはカーテンの織のように使われて迫力があり、境界のあいまいさがより鮮明になったと思います。伊東さんは、劇場やホールが、市民が開かれた場であると同時に、クリエイターの発表の場であるという、つくる側のスピリットをよく分かってくださっている方だと思います。舞台デザインでもそれが伝わってきました。歌劇院の空間デザインの一



台中国家歌劇院で上演した向井山さん演出の「La Mode」

部をそのまま舞台に持って来たようなすばらしいものでした。向井山さんが建築空間を巡る時に考えるのは、通所者のほか、どういふ人が出入りして、どういふ風に使われているのかなどだという。「台中国家歌劇院では、オープン前の市民の反応がとても印象的で、ローカルバスに乗ったり、マーケットに行っている人々と話すと、ほとんど皆さんが歌劇院のオープンを楽しみにしていらっしゃったんです。ネギを売っていたおばちゃんも持ち運いと云ってました。こけら落としでは、こういう人たちに私を分かってもらい、大劇場と生活のテリトリーとの境界をど

れだけあいまいでできるの「Mode」のテーマにもなり、この作品は10月上旬、東京・スパイラルホールでも上演された。

今回の特別のタイミングとの関係性を象徴的に表現「マンスも、さいたまトリエンナーレ2016 (さいたまトリエンナーレ 10月) のイベントの一環されている。埼玉県在住の民家を舞台に、向井山さんと同じくオランダを拠点にダンスの滝沢水麻さんのパフォーマンスとインスタレーションを織り交ぜ、タイトルは「Home」(家) といった記憶のメタファー。現代の家、家庭、家族を問う「会場の民家は100年ほど前建てられた家で、中心に仏壇とて、私たちの知る家とは随分ここを見つけたときに、少々の人の気配を感じたんだ。この間、住んでいた人の気配が記憶のメタファーで家や家」と思いました」

「Home」は12月11日まで、平日は滝沢さんのパフォーマンス。詳細はトリエンナーレ2016の公式サイト://mitamatriennale.jp/art

市民が集う気取らないオペラハウス

「ほとくの想像を超える自由な使い方がされていて、オペラなどの公演がなくても大勢の市民が物歩きし立ち寄る場としてに変わっていました。気取らないオペラハウスができたのが多くにとっては一番うれしいですね」

設計開始から11年の歳月を経て9月30日に台湾・台中市にオープンした「台中中国国家歌劇院」の設計を担当した伊東豊雄さんは、感慨深げにそう語る。設計完了後、1年半施工者が決まらないなど「絶望的な状況」を乗り越えての完成となった。

コンセプトについて改めてこう語る。「中と外をつなぐという外のような内部空間をつくりたいということと、流行の繊細できれいなものではなく力強いものをつくりたいという思いがありました」

建築を自然に近づけるという伊東さんの一貫した考えも強く伝わってくる。



「柱と梁に太いチューブを使って、水平方向のチューブは床が壁に、壁が大井につながり、柱、大井の区別がない構造になっています。外壁と内壁も連続した構造です。言ってみればどこまでもつながっている洞窟のようなイメージです。そうは言っても建築は幾何学で成立するので、ベースは直交する幾何学グリッドの変形です」

伊東さんが聞いたのは、こうした「境界」を可能な限りなくした建築を建築主、アーティスト、市民が伊東さんの想像を超えて自由に使っているこ

と、劇場使用へのプロジェクト。屋上や観客席の池でのパフォーマンスなど。「理想的な使い方をしたいですね」

大中小3つの劇場のうねりこけら落としとしてアーティストの向井山さんが上演したダンス・パフォーマンス「La Mode」は、男と客席などの「境界」を築き、テーマ、伊東さんは「建築家、アーティスト、市民が伊東さんの想像を超えて自由に使っているこ

- ▷建築主→台中市府
- ▷所在地→台中市西區東寧路二段101號
- ▷構造・規模→RC一部S造地下2階地上5階建て延べ面積、182万㎡
- ▷大劇場(グランド・シアター) 2007席、中劇場(プレイハウス) 796席、小劇場(ブラック・ボックス) 200席
- ▷設計者→伊東豊雄建築設計事務所・大塚聯合建築設計事務所
- ▷施工者→廣財建設
- ▷竣工日→2016年9月30日
- ▷用途→劇場、情報、飲食、公園